

# 練馬区教育委員会教育長賞

## 『貧困と税』

練馬区立大泉西中学校 二学年 飯田 華乃

総合の学習で貧困について調べたとき、貧困が発展途上国など遠い外国の話ではなく、日本の中でも起こっている問題なのだと思って驚きました。日本での貧困は、周り比べて貧しいという意味で相対的貧困とよばれ、日本の子どもの約七人に一人が該当するとされています。新型コロナウイルスの影響で貧困世帯が急増する中、改めて考えるべき課題の一つなのです。

昨年、一律給付金の話を耳にしたとき「みんながもらってしまつと、本当に困っている人の苦しみは変わらないのではないか。」と思いました。この一律給付金は税金から出されました。税金は、みんなが納めたお金だからみんなが一律に利益を受けるのは平等に思えます。しかし見方を変えると、元々あった貧富の差は変わっていないので、不平等だとも考えられます。貧困は、その人だけの努力では抜けだせません。貧しい家庭に生まれると、十分な教育が受けられず、低賃金の職に就く

ことになります。やがて、子供が生まれても十分な教育を受けさせてあげられないのです。このような貧困の負の連鎖は永久に続きます。日本では、税金があることで義務教育期間の九年は学校に行くことができます。そのうえ外国と比べても教育水準が高いので、十分な教育が受けられないという言葉に違和感を覚えた人も多いと思います。しかし、日本の中学生の五十パーセント以上が塾に通っていることから、学校だけでは教育は平等だと言いきれないのではないのでしょうか。また、今も生活保護などの貧困世帯への支援制度はありますが、生活保護を受けている世帯と一般世帯では大学進学率に約四十パーセントもの差があります。生活保護の受給額から生活費を差し引くと、勉強のために必要なお金は残らないのです。日本には、税を納められない人のために税金を使つのは無駄だと考える人もまだまだ多くいます。しかし、このまま中途半端な支援を続けていけば、日本の貧困者数

は、ますます増加します。そして今よりも多額の税金が、貧困対策に使われるでしょう。その負担を強いられるのは、未来の大人たち。つまり、私たちがこれから生まれてくる子どもたちです。私は、今の時点で貧困を抜け出すために多くの税金を使つほうが、税金の無駄遣いを減らせると思っています。だから、早急に貧困世帯への税の活用を見直すべきです。そして、人々の貧困に対する知識を増やし、偏見や差別をなくさなくてははいけません。人はきっと、今の状況や自分にとって身近な存在のために行動します。これは、予算を決める国会議員の方々も同じです。しかし税金は未来の希望にも未来の負債にもなります。想像力を豊かに未来のことや、自分に接点のないような人々のことを考えたうえで、大切に使われる税金であってほしいと思います。なぜなら税金は、国民全員の実力の結晶だからです。